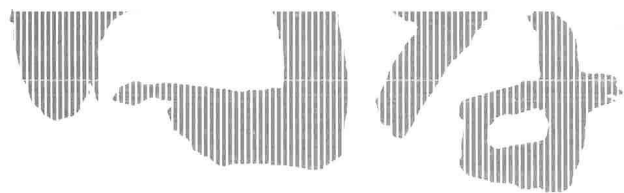


花登筐

大和布衣
中少
出

太陽編

花登筐



文藝春秋

太陽編

花登筐（はなと こばこ）

昭和3年、滋賀県に生まる。26年、同志社大学卒業後、作家活動に入る。テレビ作品「番頭はんと丁稚どん」「やりくりアパート」で喜劇作家として頭角を現わし、以後演劇、テレビ作品、小説などに幅広く活躍。43年、東海テレビ「飛騨古系」で明治百年記念芸術祭芸術祭賞を受賞。現在「劇団喜劇」主幹。

主な作品

「細うで繁盛記」講談社
「どてらい男」徳間書店
「あかんたれ」文藝春秋
「花ぼうろ」番町書房
「花登筐長篇選集」十巻・講談社

さわやかな男^{ヤツ}
（太陽編）

昭和五十二年七月五日 第一刷

定価七八〇円

著者 花 登 筐

発行者 桼 原 雅 春

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

一〇二 東京都千代田区紀尾井町三

印刷 凸版印刷

製本 大口製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

さわやかな男ヤッ
(太陽編)

装
幀
票
屋
充

一人の男

男がひとり歩いて来た。

夏の午後の太陽が、きらきらと照りつける乾からびた道は、歩くだけで土埃が白く舞う。

畦の小蔭で涼をとっていた百姓のじいさんは、その埃の方を見て、慌てて麦藁帽を顔にかむると横になり寝ているふりをした。

終戦後一年、この田舎にも、あんな姿の男が、日増しに増えて来る。野良で仕事をしていると、

へおじさん、米を売ってくれませんか？

と声をかけてくる。売る程、余分の米はないと断わると、
へ薯でも野菜でもいいんですよ

と粘ってくる。それも断わると、

へそこにあるやありませんか？

と指をさす。畑にいるのだから、茄子や胡瓜は作っている。これはまだ喰べられないとはねつけると態度がガラリと急変する。

へ近頃の百姓は、あくどくなつて闇の儲けにならんと何も売らんそうやけど、なにもただでくれとは言うてへん。金を出す言うてるのや。な、おっさん、人助けや思て売つたれや。

おじさんからおっさんとなり、揚句は、情知らずだの日本人じゃないのかとか、時にはいい死に方はないぞと脅迫めたことさえ言う。闇屋ならば、集団で、しかも、あたりをつけた農家へ直接に来るから話にもなるが、一人て来る買出しで、しかも復員服を着た男が一番危い相手。今近づいて来るような男がそうである。

戦闘帽に陸軍の軍服、ゲートルこそ巻いてはいぬが、編上靴といわれる靴にリュックサック、そのリュックサックも、片手で担ぎ、その中に喰い物を詰めて帰らねば撃ちてしまむの決意すらありありとうかがえる。

案の定、その男は、じいさんのいる畦の近くで立ち止ると、こちらを見た。

(来たな)

じいさんは、麦藁帽の隙間から見て舌打をしたのは、男が自分の方へ近付いて来たからである。

このまま狸寝入りを決めこむか、それともどう言つて追っ払うか、迷っているうちに、男は、もうじいさんの足許へ来て、足を止めてじいさんを見下した。

歳の頃は、三十歳にはなつてはいないようだが、見るか

らに精悍^{せいけん}そのものの男であつた。身体そのものはかなり瘦

せてはいるようだが、そう感じさせぬのは骨格が逞しいせいだろ。だが顔はその衰えをはっきり表わしていて、無精ひげさえ気付かぬ程、日焼けした肌は、むしろどす黒い頬骨がとがっているため、目だけが、ぎょろりと大きく無気味な鋭さを見せて、じいさんをおののかせた。

だが、次の瞬間、男は、じいさんの傍を素通りすると畦を横切つて、畑の奥へ向つて行つた。

じいさんは、ほつとしたが、（いかん！）と口走つた。この奥には馬鈴薯畑があるからで、慌てて体を起してぎよつとした。

じいさんがぎよつとしたのも無理はない。

男の背中、乾いた部分がない程、汗で濡れていたのである。

その間にも男は、馬鈴薯畑の方へ向つて歩いて行く。じいさんは、鍬をにぎると、立ち上つた。

あの眼光の鋭さでは、どうやら一筋縄ではいかぬようである。近頃、夜の間にあの畑で馬鈴薯が盗まれるが、この白昼堂々と盗みに来るとは、よくもまあと、じいさんは、背を低くして、後を追つた。

馬鈴薯畑が見渡せる所迄来るとじいさんは畑に身を隠して、うかがつた。

だが男の姿が急に見えなくなっている。

（掘つてやるな）

じいさんは、助けを呼ぼうと、あたりを見廻したが、麦刈りも終り一段落した今、この暑いさなかには誰も野良には出ていなかった。

じいさんは、鍬をにぎりしめて、一步、二歩と馬鈴薯畑に近付いた。だが、男の姿は、忽然と消えていた。

さては感づかれたかと、じいさんは、立上つてもう一度見渡すと、馬鈴薯畑の向うに、男の帽子がちらりと見えた。そこは畑より一段低く琵琶湖に通じる小川の道になっている。

じいさんは、用心して近付いて、畑の柵からうかがつた。男は小川の傍に立つて、じつと行く手の湖を眺めていたが、やがて体を屈めると、小川の水を掌で掬つた。

じいさんは、顔を洗いに來たのかと、やや安心はしたものの、まだまだ油断は出来なかつた。一仕事をする前に、汗を流すのかも知れないし、また、このあたりで一番冷たい清水の流れるこの小川のあることを知っているのは、この土地の者だけである。他国者が、誰にも聞かずに來れるわけがない。ということ、しよつ中この馬鈴薯畑へ來ていると見てよいと、息を殺して、じいさんがうかがっている、男は、奇妙なことをした。

掌で掬つた水をじつと見つめているだけで顔を洗おうとも飲もうともしないのである。

掌に掬った水は、自然指の隙間から小川へ落ちて行く。すると男は、又、掌で水を掬うのである。飲めるかどうか調べているのか、それにしても顔ぐらい洗ってもよさそうなものだ、じいさんは遠慮なく照りつける夏の陽ざしに、男の頬に汗が雫となって落ちて行くのを見ながら、益々不審を感じた。

それを、何度繰り返していたろうか、やがて男は、川に落ちた水滴の波紋がゆっくり静まるのを見ると立上って小川の道を川上に向って歩きかけたが、じいさんの姿を見るに止まった。

その鋭い眼光と視線が合ってじいさんは黙っているわけにはいかず、

「どうかしたんけ？」

と訊ねた。

男は、額の汗を手で拭いながら、

「顔を洗おうと思うたんやが……」

と、もう一度、小川を見た。

「その水は、綺麗な水やで」

じいさんが、教えてやると、

「綺麗過ぎるから、よごしは出来ん」

男はそう言い捨てるともう歩き出していった。

（水が、こんな綺麗なものは、気付かなかった）

男はそう言いたかったのである。

汚れた水を見慣れ、水とは汚れたものだと思ひこんでいる者が、初めてこんな清水を知ったなら、恐らく、驚き、半信半疑で顔を洗い、口の中に含み、

（水とはこんなに綺麗なものだとは、知らなかった）と感嘆することだろう。だが知らなかったと言っても、気付かなかったとは言わぬであろう。

しかし、水とは、こんなものだとその綺麗さに慣れ切つて、何とも思わなかった者が、突然、汚れた水の中で暮さねばならなくなつたとしたら？　そして、久し振りに、再びその清水に接したとしたらどう思うであろうか？　恐らく、

（水とはこんなに綺麗なものだとは、気付かなかった）

と「気付く」という言葉を使うのではあるまいか。そして、その水を掌で掬つてみても、顔を洗うことで水を汚すことをためらうのに違いない。

何故ならば、清らかな水の貴重な価値を知ったからである。

この男が、飲もうとも、汗で濡れた顔を洗おうともせず、じいさんの小首をかしげさせたのはその為である。

幼い時から清水に慣れ、その価値を知らなかったこの男が、初めて濁った水を見たのは生後二十年、兵隊として戦争に狩り出された時であった。

男が初めて見た異国の水は、揚子江の水であった。

全長五千八百キロ、チベット高原に源を発し、中国大陆を横断するその川の主流の水はもとより、縦横に延びるクランクのどの水を掌で掬ってみても、汚物に濁り、透明な水は求めようもない。そんな中国戦線から、米英との開戦と共にビルマの戦線へ品物のように移動させられた男を待っていたのは、雨期を迎えた果てしないジャングルの湿地帯であった。ここにある水は、もはや、ぬかるみの中のうわずみで、マラリヤの病原菌をふりまく蚊のぼうふらを育てる魔の水でしかなかった。そして、六年間、男は、故郷の水を慕い続けて来たのである。

故郷の町の傍に広がる底迄澄み切って見える琵琶湖の水——。町から離れてはいるが、少年時代の思い出の数々が残っているこの小川の清水——。

この男が、ビルマから復員して来て、両親の待つ、京都へ直行せず、この生れ故郷の町の駅へまず降りたのは、この夢に迄見た清水をわが手で掬って見たかったからである。ちょうど幸い、この小川は駅と町の中間にあった。本来が、町の中に駅がある筈だが、明治の初め、鉄道が着く時に、文明が町に害毒を流すという頑迷な町の長老達の猛反対にあって、鉄道の方が町を避けて敷かれ、従って、町も駅から離れていた。

その駅の名は、東海道線近江八幡、そしてその町が、この男の生れ故郷でもあった。

近江八幡——。その町は、琵琶湖の東海岸、俗に東江州と呼ばれる日野川と愛知川の中間にあって、安土城のあった安土の町に隣接している。この町が出来たのは天正年間、近江七十五万石、豊臣秀次が、八幡山に城を築き安土の町より人を移し近江八幡なる城下町を造ったのに始まる。

だが、そんなことよりこの町の名を有名にしているのは、近江商人の発祥の地としてであらう。

この八幡、日野、五箇荘を中心にして、江戸時代より名を為した商人は、列挙すればきりがなからう。昭和の世になっても、商社や紡績を例にとってみても、伊藤忠、伊藤万、又一、飯田高島屋、丸紅、東洋棉花、田附、呉羽紡、東洋紡、敷島紡などの創始者は近江商人なのである。かの西川甚五郎なる人もこの近江八幡出身であるから、商人を産む母胎の町でもあった。

だから、子供が産まれれば、商人にするのが、親の希望でもあり、有数の商人になることが、少年達の夢であった。戦前の日本の家庭の子弟の進学のエリートコースは、中学より、一高、三高と呼ばれる高等学校、更に東大、京大などの官立大学であったが、この土地の子弟のエリートコースは、商業学校から高商または商大への道であった。だから他の土地では、少々出来の悪い子供を持つ親に小学校の先生が、

「中学は無理ですから商業学校へ」

とすめて落胆させるところだが、ここでは、
「商業学校はあきらめて中学へ」
と逆になっていた。

どの土地にも異端者が居るように、この土地にも商人になるのを嫌う少年もいた。

その少年の名が、城勝、この復員兵の本名である。

勝が商人を嫌ったのは、父の平太郎が呉服の行商をやっていたからであった。と言っても、店舗を持たぬ行商人を父に持ったことを子供心に恥しいと思ったのではない。

近江商人の歴史は、行商から始まるのである。大体が、琵琶湖に殆どの面積が占められ、山に囲まれた僅かな土地で農作物に頼るには不安定の上に、江戸幕府成立後、城下町でなくなつてからは領主の保護もなく、生活の為には行商に出ざるをえなかったのである。そして、徐々に近江商人の行商先がそれぞれ固定されて来ると、行商先に出店を持ち、その出店が本拠となつて次第に財を為し拡大して行つたのである。八幡商人も、その例に洩れず、特産物である蚊帳を行商したのが始まりであるから、行商はむしろ商人として大成する基礎で、当然と見られても、恥とはされなかった。

勝少年が、商人を嫌ったのは、父の行商の結果が家族にかなり影響を及ぼしたことによる。

父の平太郎が行商に出ると、近いところなら十日間、遠

いところなら一カ月も帰つて来ないということもある。その待っている間の生活が、まず暗かった。

母のあやは、二言目に、
「お父さん」と「勿体ない」がついて出るのが口癖で、

「お父さんが働きに出てはるのに、遊んでいては勿体ないやろ」

と、近所から針仕事の手内職を引受けてやる為、勝少年は、小学校から帰ると、六歳年下の妹美代子を背負わされて、毎日子守をせねばならなかった。遊びたい盛りの子供にとつて、たえず背中にこぶつきがいては、遊びたくとも友人達から敬遠されるし、といって、美代子を放っておくと、あやからは、

「妹の面倒もよう見んようではどうするのや。お父さん帰つて来はったら叱つてもろてやる」

とおどかさされる。その上に欲しいものがあつてねだつても、

「お父さんが帰つて来はつてからお言ひ。うちには、そんな勿体ない物を買ふ余分のおぜぜがないのや」

と、これ又、お父さんと勿体ないが出る。

おぜぜとは金のこと、銭から変化したのでだろうが、特に琵琶湖の東南地方では、ぜを訛つてじえと発音するから、ぜぜは、じえじえと聞こえる。この発音は、このぜぜのみならず、セ音全般がそうであり、これを比喩する言葉に、

へ瀬田から膳所迄汽船で十銭」

と言うのがある。瀬田も膳所も港のある地名だが、それが口から出ると、

へい、え、たからじ、えい、え、迄、汽し、え、んで十し、え、ん、

と聞こえるのである。殊に、あやは、その瀬田の近くの草津から嫁に來た女であるから、はつきりおじええと訛った。

その錢も、帰って來る父次第で、やっと父の平太郎が帰って來ても、その父の表情で又、すべてが變つて來るのである。

父がにこにここと上機嫌で、時には土産物など買つて歸つてくる時は、ぱつと家中が明るくなるし、母のあやもいそいそとすき焼の支度にかかる。

このあたりは有名な近江牛の産地であるが、めつたにすき焼など喰べる家庭はなく、すき焼は、家庭での一番の贅沢な御馳走でもあった。だから、母がすき焼の支度を始めると妹の美代子迄が、はしゃぎ出す。

しかし、父が不機嫌な時は、家の中は、父の居ぬ時よりも暗く、大きな声を出しても母のあやに叱られた。

そうなる物をねだるところか、出來るだけ父の傍に居ない方が叱られないだけ得策なのである。

勝少年がその事情を飲みこめる迄にかなりの月日を要したのも無理はない。その頃はまだ七歳の少年であつたのだ。

ある時、父の平太郎が歸つてもすき焼の支度を母のあやがしないので、期待が外れ、勝少年は、

「何ですき焼をせえへんのや？」

と台所に行き腹立ちまぎれに大声で聞くと、母は、隣りの座敷兼用の居間にいる父に聞こえぬかと、どきりとして勝少年の腕を掴んで外へ引つ張り出して、

「勝、何でそんなこと大きな声で聞くのや！」

と叱りつけた。

しかし、勝も、

「そうかてお父ちゃんが歸つて來はつたらすき焼喰べさしたるて言うたやないか」

と抗議すると、あやも叱つた方が無理だつたとわかつたか、

「ほうは言うたけどお父さんの商いがようなかつて品物が売れんでな、おせげが入つて來んかつたさけや。ほやさけお父さんの前で、ほんなこと言うたらいかん」

品物が売れなければ、何故父の前でそんなことを言つてはいけないのか、それは納得はいかなかった勝少年ではあつたが、金がなければ、何も買えないことは知つていた。

しかし、父が、売れて金を持つて歸つて來る時や、持つて歸らぬことがあつたりするのは何故だろうか？ それはどう考えてもわからなかつたのも又、当然である。

だが、それを母に聞いては、叱られそうだったし、まし

て父に聞くことが出来ぬことは、子供心にも察していた。

しかし、その疑問が、どうやらおぼろげにわかつて来たのは、勝の八歳頃で、父が売れずに帰って来た時には、すき焼は出ないが、代りに必ず訪ねて来る男があったことからである。

その男は、四十歳過ぎの小柄な色の黒い、いつも和服を着た男で両親は面と向っては黒やんとか番頭はんと呼んでいたが、蔭では京の番頭とか黒とか呼び捨てていた。

京というのは、京都から来たということではなしにこの八幡市内にある呉服問屋の京屋を略しての京で、その番頭の本名は黒田弥助と言った。

京屋は問屋といっても、看板をかけ、店を出しているわけではなく、路地にある小さな二階家で、外からは、しもた家のように見えるが、中へ入ると、表一間を残し、二階迄が殆ど商品の山で、そこに、五、六人の奉公人が働いて次々と仕入に来る行商人に応対をしている、つまりこの地方の行商人専門の京呉服の卸屋であったのである。

勝も後でわかったことは、この京屋は、元来が京都の室町に店を持っていて、主人もそちらに居て、こちらは出店、その出店をまかされているのが京の番頭黒田であった。

父の評価によると、この黒田は、柄に似合わぬし、こい男とのことであったが、事実、父が売れずに帰って来ると、どこで聞くのかその翌日には、必ずと言ってよい程、顔を

見せてそのはしこさを物語っていた。

勝少年も、初めは、父から呼ばれて、この黒田が来るのかと思ったが、そうではなしに顔を出すのだから不思議であった。

だが、よく考えてみれば、父が行商で売れた時は、品物も無くなっていて、卸屋の京屋に顔を出さざるを得ないが、売れない時は、行く気もせず、そこで黒田の方から顔を見せるといふことで、大体、父の行く先も、帰る予定日もわかっていようだし、それでなくとも狭い土地だから、町から駅迄離れているし、通っているバスにでも乗れば、誰が行って誰が帰って来たかぐらいのことを耳に入れるのは黒田には朝飯前のことであつたらう。

黒田は、訪ねてくると、呉服屋の番頭らしく柔らかない物腰で、

「帰つといやすか？」

と京言葉で聞くと、返事も待たずに、のこのこと上へ上がり、売れなかったことを知りながら、

「どうでした？」

と聞いて、不機嫌な父をそっぽ向かせた。

だが、黒田はおかまいなく父が持って帰った品物の包みを開いて取り出すと、算盤をはじいて計算を始めるが、その速いこと。やがて、

「売れたんは、全部で××円どすな」

と平太郎に告げると、初めて父は、口を開く。

「残った方が多いんやで」

「そうどすな」

「それわかってたら、売れた分全部金を持って行くとは言わんやろな」

「いえ頂いて行きます」

「番頭はん。そらちよつと無茶やろ。そんだけしか売れんわ、足代から泊り代とうに蹴込んで足が出るんや。今度の分はこの次にしてもらお」

「そうはいきまへん。清算は一回ずつにして頂きまへんと。それでのうても他^{ほか}さんは、品物と引き換えにお代金は頂いてますのに、あんさんとこだけは、売れた分だけ後払いてことにして勉強させて貰てるんどすで」

「はやさけ、売れん品物廻すてことか」

「何を言わはります。他さんではこの手の品物結構売れますで」

「ほな何で売れんのや？」

「まんが悪うおしたんやろ」

まんとは、運のことで、黒田はそうは表現したが、売り方が悪いと言っているかのように聞こえる。

それには父もカッと来て、

「何ぬかしとる。こんなもっさりした柄、近頃は田舎でも着んで断われたわ」

「そらおかしおすな。これは昔からある柄で、ええべ、程、柄は変わらんもんで、流行^{はや}の物程、安もんやてよう説明して頂かん」と

「そら説明してるわいな。けど売れんもんは売れんのや。あてがい扶持に売れ残りの品物は渡されるわ、金は一人前とられるわでは、こつちが吐き出しいかれこれやないか」
父は益々激昂する。

勝少年にもわかったことは、どうやら父は、行商に出る時には、品物を、選択出来ずにその京屋の番頭の黒田から渡される品物を持って行くらしい。だから売れないと言う父に、黒田の方は、

「それなら、現金で仕入れて頂いてもええんどすで」と回答する。

つまり、品物を選択するのならば、現金で買えということらしい。

そう言われると父は、困ってか、それ以上は何も言わなくなる。すると黒田は、

「まあ、今度はせいぜい売れそうな品物を廻して埋め合わせしますさかい、今日のところはひとつあての顔立てをお願いしますわ」

と、頭を下げて、父に財布から金を出させて、残りの品物を持って帰るのが、いつもであった。

「あいつ！ 馬鹿にしやがって……」

黒田が帰ると父は一層不機嫌になった。

「ぜ、ぜ、さえあつたら、あんな番頭に馬鹿にされへんのに」
そう嘆くこともあつた。

それを聞いて勝が、事情をのみこめたのは、父が、現金を持っていぬ為に、品物の選択が出来ず、従つて、京屋から売れ残りの品物ばかり渡されるので売れないということであつた。その証拠に、番頭の黒田が、埋め合わせをすると言つて歸つたその次の行商の時は、割と父が上機嫌で歸つて来るが多かつたからである。と言うことは、現金を持って行つて売れる品物を仕入れれば、毎回上機嫌で歸つて来れるということではないか。

ところがである。それを感じたのか、母のあやも、
「な、あんさん、何なら今迄貯めたおぜぜ出しまひよか。
一回分の仕入代位なら何とかある思いますけど」

そう遠慮がちに言うとは、父は、

「阿呆！ もし、あのぜぜ出して売れんかつた時はどうするんや。それこそ、元も子ものうなるやないか！ それやつたら今のままの方がまだ堅い！ ええ歳して、それ位のことかわからんのか！」
と叱つたではないか。

勝少年はそれを聞くと又、わからなくなつて来た。

(ぜ、ぜ、さえあつたら)

と、嘆いた筈の父なのに、どうやらそれ位の金はあるら

しいこともさりながら、その現金で仕入れても、品物は売れるとは限らないらしいと聞いてである。

するとである。父は、行商に行く時に、一体何をめどにして行くのであろうか？

売れるか売れないかわからない品物を持って出かけていることになる。だから、歸つて来て機嫌がよかつたり、悪かつたりするのであるまいか。そこ迄わかつて、勝は、
(そら、ちよつとおかしいぞ)

と首をかしげた。

勝少年が、首をかしげたのは、ほかでもない。

(そんなら当てずっぽの魚釣りやないか——)

そう考えたからである。

勝は、毎朝魚釣りに行つた。

いや、行かざるを得なかつたのは、仕事として命じられていたからである。何故ならば勝の家では、にわとりを飼つていた。

勿論、卵を産ませるためである。その卵は、もつぱら妹の美代子の口に入つた。美代子は生まれた時から体が弱く、殆ど病氣がちで、食べものも片寄り、卵以外はめつたに喰べなかつたし、又、他の物を喰べさせると胃腸をこわした。にわとりにいい卵を産ませるのには、カルシウム分のある餌が必要である。そこで、勝は、琵琶湖へ川魚を釣りにやらされた。餌には、小さい川魚を焼き、砕いてにわとり

に喰べさせるのが一番であるからだ。

琵琶湖には勝ならずとも、誰でも釣れるぼてじゃ、こいう魚がいた。これは、たなごの一種で、川のたなごは、早い流れの中で育つため身もしまっているが、湖のたなごは、身が肥り、ぼてが入っているのだからぼてじゃこと呼ばれている。

ぼてじゃ、こは、従って、年中、腹を空かし、ガツガツとしていてその上総身に知恵が廻りかねる為か、飯粒でも面白い程釣れた。

にわたりの餌には、このぼてじゃ、こで充分であるが、釣れるからといって、いくら釣っても、何もならない。ぼてじゃ、こは苦味ばかりで、人間様の口に入れられる魚ではないからである。勝は妹の美代子が好きだったし、可愛かった。妹の喰べる卵を産むにわたりの餌に、ぼてじゃ、こを釣るのはいとわなかったが、それでも子供心にそう割り切るものではない。やはり、傍で卵焼きを喰べている妹を見ていると、欲しかった。だが、欲しいと言っては、兄貴の自分の男がすたる。ようし、ぼてじゃ、こを釣る手間で、俺の口に入る魚を釣ってやれと考えたのは、自然である。

それに、ぼてじゃ、こを釣る為に糸を垂れては、友人達にも笑われる。いかに大物を釣ったかが、このあたりの少年達の自慢話で、一番軽蔑されるのは、ぼてじゃ、こを釣ることである。

大物と言っても、岸から釣れる湖魚は、せいぜいもろことか、はえ、小鮎の程度で、夏場になるとはす位であった。しかし、それを釣っていても、ぼてじゃ、こは、引つ掛かるから、わざわざぼてじゃ、こだけを釣る必要はなかったのである。

しかし、ぼてじゃ、こは、水さえあれば、どこでも釣れたが、他の魚となるとそうはいかない。魚の方が賢明であるからである。

当然、釣れる場所を自分で捜さねばならない。そして見つけた釣り場は、極秘であったし、仮に友人達に見られても、そこで他人が釣ることが出来ない一種の縄張りとしての不文律が出来ていた。

その釣り場を、子供達は、自分のスイバと呼んでいた。

スイバと言うのは、元来、上方語の風呂屋の隠語であるが、この場合は、粹場から来たのであろうか、秘密でいいことの出来る場所との意味が含まれているようだ。

勝少年もそのスイバを見つけていた。そこがあのじいさんに怪訝な顔をさせた馬鈴薯畑の傍の小川であったのである。

もっとも、殆どは、あの小川の下流のほんの先にある湖の洲で釣っていたし、雨ともなれば上流へ出て、上って来る鮎や鯉を、網ですくうこともあった。

しかしである。たとえ、そのスイバが、見つかったとし

ても、そこでなら人間様の口に入る魚が楽々と釣れるというわけにはいかなかった。やはり、時間によって、魚の居る深浅度も違い、季節によって餌から針迄変えねばならなかった。

それ程考えて、勝の口に入るもの、こや、えが、朝の一時間程の間に多い時で五、六尾程度釣れば、いい方であった。

勝が、毎朝行く魚釣りでもそうなのに、父親が、売りに行く行商の品物を当てずっぽで持って行っても売れる筈がないではないか？

勝は、そこ迄考えて、いや当てずっぽではないぞと思ひ直した。

父親の平太郎も、行商のスィバを持っていくようであったからである。いつも平太郎の行く先は山陰路の島根、鳥取から北陸路、富山、新潟と決っている。それがスィバとすれば決して当てずっぽではなく、後は、針や餌を釣れるものに変えればいい筈である。

(呉服物にも、針や餌はあるのやろけ？)

それは品物であることが少年の勝にも、すぐに判断が出来たのは、父の持って行く品物が、その都度、変っていることから確かであった。

(お父ちゃんも、スィバ持って針や餌、いつも変えてるんやないか？ それやのに何で釣れんのけ？)

いくら変えても、魚に合わぬ餌や針では、釣れる筈がない。

(そうや。そこなんや)

つまり、父の平太郎は、その餌や針を、番頭の黒田にあってがわれているのである。

(それでは釣れんわ)

勝は、ようやくその解答らしきものを発見した。

自分のスィバへ魚を釣りに行くのに、他人に針や餌選んでもらうことと同じやないか。

それでは時たま釣れることがあっても、外れることが多い。それが、父が行商から帰って来る時、上機嫌、不機嫌になって現われ、すき焼となり、番頭の黒田の来訪になりするのである。

(お父ちゃん。何で、自分で餌や針を選ばん？)

当然、その疑問を持ってから、再び、父が母のあやに言った自分の金で仕入れに行つて(売れんかったら元も子もない)という言葉を感じ出したのである。

どうやら、その父の平太郎の言うことは、自分の選んだ餌や針で釣りに行つて、一尾も釣れなかった時のことを指すらしい。

(そうかも知れんのう)

勝は、その時、そう考えた。魚を釣る餌は、みずとか、さなぎ、せいせいが赤虫である。釣れなくても餌は、い

くらでもある。

しかし父の売る品物となるとそうはいかない。皆現金で買うのである。売れなかったら、品物は残ってしまう。

だから、父の平太郎は、危険なことは出来ないに母に叱ったのであろう。

その意味が解けた時、勝は、嬉しかった。子供心にも、父の商売に関するいろんなことが理解出来たからで、自分がひとかどの大人になったような感じがしたのである。

しかしである。勝少年が、再び疑問を抱いたのは自分で魚を釣りに行く時、選んだ餌や針で釣れば、父のように全然釣れぬということはなかったからである。

勝は、平太郎に、そのことを聞こうとしてやめたのは、もし父に話をしたら、

（釣りとは商売と一緒にするやつがあるか！）

と叱られそうな気がしたからである。

しかし、京屋の番頭の黒田になれば、何となく聞けそうな気がして、いつものように、集金に来た黒田の帰りを戸外で待ちうけて聞いてみた。

「おっちゃん。品物を売ってそんなに難しいのか？」

黒田は、いきなりそんなことを口にする勝を不審げに見つめていたが、

「ぼん、何でもそんなことを聞きたいのや？」
と問い返して来た。

「何で、お父ちゃん、売れる時と売れん時があるさかいや」

「ほうか。ほんなら教えたろか。ほら難しいもんや。何で言うたらな、呉服もんは他の品物とちごてな、色や柄の種類が多いさかいや」

「色や柄？」

勝は、それが針と餌ではないかと目を輝かした。

「ほうや。それもな、人によって好みがあるしな、その上に厄介なものは流行すたりがあるてことや」

つまり、時間によって、糸の加減を考え魚によって餌を変えることだなと勝少年はすぐに理解出来た。

「けどや。それはやっているうちには、わかるもんやろ」

そう言うのと黒田は、驚いたように、

「ほうや。ぼん言いにくいことはつきり言うなあ。けどそのこと、お父ちゃんの傍で言うたらいかんでえ」

「何でや？」

と聞いてから勝は、どうやら、父が、売れぬのは、あれだけやっていてもまだわかっていぬからではないかと気付いたのである。

「ほなおっちゃん。お父ちゃんが、おっちゃんに品物選んでもろてるのは、自分ではわからんさかい？」

そうずばり指摘されて、黒田も、まさかそうだとも言えず目を白黒させて、